

秘本三國志
(二)

陳舜臣

秘本 三国志 (二)

陳舜臣



秘本 三國志 (二)

昭和五十年七月三十日 第一刷
昭和五十二年十月十五日 第二刷

定価 九八〇円

著者 陳 舜 臣

発行者 檜 原 雅 春

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三

印刷 凸版印刷
製本 和田製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

目次

風姫は舞う

五

蜀道を行く

五三

日は没す 岷山の西

九八

天は晴れたり

一四五

背後に雷鳴あり

一九二

さすらい將軍

二三九

装
幀
御
正
伸

秘本
三
国
志

(二)

風姫は舞う

1

右の眉がびくとつりあがったのも一瞬で、曹操はすぐにもとの表情に戻った。
「ほんとうに怒っているではありませんね」
と、陳潜が言ったときのことである。

「なぜわかる？」

しばらくして、曹操は抑揚のない声でそう訊いた。

「孟徳さまのおからだは、そんなに大きくみえませんでしたから」
と、陳潜は答えた。

孟徳とは、曹操の字である。

「妙な鑑定法じゃな」

曹操はそう言っただけで、陳潜の見立てが、はたして当たっているかどうか、判定は下さなかった。

酸棗^{さんそう}県^{けん}に董卓^{どうたく}征討連合軍の七将が、ずらりと本陣をならべていた。黄河のむこう岸には、盟主の袁紹^{えんしやう}、王匡^{おうきやう}の軍があり、洛陽南方には孔伋^{こうゐん}、袁術の諸将が兵を按^{おん}じている。それなのに、じつさいに討って出たのは、曹操の軍だけであつた。はじめから勝つ希望はもっていない。

——曹操は果敢なものよ。おそろしや。

という評判をあげるだけでよかった。

すでにその効果はあつたといえる。しかし、曹操はそれに満足しなかつた。

軍議の席で、彼は主戦論を唱えつづけた。

正式の作戦会議のときだけではない。諸營の首脳部は、相互に表敬訪問をおこなつたが、曹操は訪問のときも、迎えるときも、

「いまこそ進撃すべきときである！」

と主張した。

ときには激昂^{げきこう}のあまり、言葉がみだれることさえあつた。

——酸棗の諸軍十余万、日に置酒高会^{ちしゅこうかい}し、進取^{しんしゆ}を図らず。……
当時の記録にそう記されている。

幹部たちは毎日宴会をひらき、酒を飲んではやがやと言いつ合っているだけだったという。

そんな雰囲気の中で、曹操は一人で腹を立てている。

その日も鮑信ほうしんが訪ねてきた。鮑信は済北さいほくの相で、酸棗諸將のなかでは、曹操と最も仲が好い。

曹操は彼にむかつて、

「西へまわるのだ。洛陽の西は、董卓の勢力圏だとばかり思われているようだが、はたしてそうだろうか？ 世間でみんなそう思ってくれているので、董卓は安心して、かえって備えをおろそかにしているのではあるまいか？ 兵員に限りがあるので、どこかで手を抜かねばならない。わしが董卓であれば、世間の定評を頼りに、洛陽の西で手を抜く。……そこを攻める。一ばん近い連合軍は南陽の袁術將軍だ。なぜ袁術軍を洛陽の西へむけないのか！ いやはや、齒痒はがゆいことではある。……」

と、興奮した語調で語った。

その席に、陳潜もいた。鮑信が帰ったあとで、陳潜は曹操に、あなたはほんとうに怒っているのではないだろう、と言ったのである。

曹操は現実主義者である。——こういえば、それではなぜ負け戦さとわかっている戦争をしたのか、という反論があるだろう。

しかし、曹操は勝敗を越えたところで、ちゃんと計算していたのである。猛將の名声をえたが、この利益は、はかり知れないほど大きい。

名聲の魔術。――

曹操はそれを知っていた。それを利用する心理も。だから、董卓が西に強いという定評を頼るのではないか、という想像ができたのである。

陳潜の指摘したとおりであった。

彼は鏡のように澄み切った平靜な心で、怒りの言葉を口に出しているのだった。

喜びであれ怒りであれ、人間は興奮すると、一種の盲目状態になる。誰もが経験によって、それを知っているので、興奮した人間を相手にするとき、自分の心を見すかされる心配はないとおもっている。ふだんは慎重に本心をかくす人でも、極端にエキサイトした人の前では、ふと覆い（おほ）をはずすことがある。――曹操は相手がちらと本心をのぞかせるとき、それを確実にとらえようとした。

いまは友軍として、同盟関係にある人間だが、いつ敵となるかしない。また将来、盟友が必要となるだろうが、誰をえらばよいのか？ 曹操は人間観察に努力している。ひそかな努力である。誰にも気づかれないと思っていたのに、この男が……

（こいつめ、油断のならぬやつ。……）

曹操は陳潜の姿をじっとみつめ、それを脳裡（のうり）に焼きつけてから、しずかに目をとじた。

「じれったいことよ。……」

曹操のそばにいた夏侯惇（かこうどん）が言った。あるじ曹操の作戦が、諸將にうけいれられないのがじれっ

たいのである。

かといって、曹操一人の力ではどうにもならない。汴水べんすいの戦いにしても、張邈ちやうはくから兵を借りて、

やっとあれだけのことしかできなかったのだ。

「兵が足りぬわ」
と、曹操は呟つぶやいた。

「また誰かに借りましょうか？」

と、夏侯惇は言った。

夏侯は二字姓で、名が惇である。曹操の父は、もと夏侯という姓であった。祖父の曹騰そうとうはかんかん臣官で、したがって実子ではない。我が家を継がせるために、夏侯家から養子を迎えたのが曹操の父である。いってみれば、夏侯家は、曹操の実家であり、夏侯惇は従弟にあたるのだ。

(この男が手本だ。……)

曹操は目をあけて、夏侯惇を見た。

彼は『名声の魔術』の逆をつくことを考えていたのである。

これから迎える乱世では、人におそれられるところが多ければ多いほど、都合がよいのだ。欲をいえば、おそれるに足りないところをおそれさせ、ほんとうにおそれるべきところはかくしておいたほうがよい。

曹操はこまかく観察し、こまかく計算する人物である。おそろしいのはここだが、これは伏せ

ておく。むしろ、

——計算を知らない猪武者

と思わせ、そのことで恐怖心をかきたてるべきなのだ。

汴水の戦いでは、彼は無謀な猪突の猛将という印象を人びとに与えた。

猪武者の見本は、そばにひかえているので、うまく演じることができた。

夏侯惇。——十四歳で、自分の師匠をあなどった人間を、たたき殺したという猛者である。

「おまえと一しよに、どこかへ兵を借りに出かけようか」

と、曹操は言った。

「よろしゅうございます。参りましょう。とにかく兵隊さえあれば……」

夏侯惇は腕をさすった。

曹操は陳潜をかえりみて、

「わしの留守のあいだ、おぬしには人を見てまわってもらいたい。どうかな？」

「かしこまりました」

と、陳潜は頭を下げた。

さすがに曹操は一級の観察者である。陳潜の背景や目的を知っているかどうかは不明だが、彼が現在の状況を把握しようと、真剣に取組んでいて、またその才能のある人間だと見抜いていた。曹操は陳潜のその才能を、自分のために利用しようと考えた。いまの曹操は兵隊の数も欲しい

が、天下の英雄豪傑についての情報も欲しいのである。

2

陳潜はためらわずに、西南の方向に足をむけた。

とくに鑑定してほしい人物を、曹操は名指しはしなかった。だが、陳潜は曹操の意中がわかっていた。いつか曹操は、

——董卓め、わしとあいつと、どちらのほうがおそろしいと思っているのかな？

と、ひとりごちるように言ったのを、耳にしたことがある。

あいつとは誰のことか、陳潜は聞き返すような野暮な真似はしなかった。きまっているのだ。

——長沙の太守孫堅に。

白馬寺のあの炯眼けいがんの支英も、この国の次ぎの時代の立役者は、曹操と孫堅であろうと予想していた。

正直なところ、陳潜は董卓の身になって考えると、曹操よりも孫堅のほうがおそろしいのではないか、という気がしてならない。

みやこを遠くはなれた長江（揚子江）を根拠地にした孫堅は、中原の不良少年あがりの曹操にく

らべて、わからない面が多い。

孫一族の富についても、いったいどれほどのものなのか、推測のしようがない。

わからないものはおそろしい。

——この本の著者の子孫というが、わかったものじゃない。

あるとき、曹操は愛読書の『孫子』の表紙を撫でながらそう言った。

『孫子』の著者は、春秋時代の呉に仕えた孫武である。孫堅の一族は、その子孫と自称していた。紀元前五百年ごろに活躍した孫武は、後漢末を去ること七百年の人物だった。どうせその家系は確証できるはずはない。

兵法家の家系は眉唾として、孫堅が十七歳で錢唐の海賊を斬ったこと、会稽の妖賊万余の衆を千余の精兵で破ったことは、現代の出来事である。黄巾の乱のときの勇戦も、世にかくれもない。その孫堅も檄をうけ、董卓討伐の兵を挙げ、長沙より長驅、洛陽へむかっていた。

彼は陣中に風姫という女を伴っていた。巫女である。まだ若い。二十をすぎてまもないが、彼女の母も有名な巫女であった。長江沿岸には、風姫の母の神託を信じる者が多かった。そして、このごろは娘の風姫が、母親以上の能力をもっていると噂されるほどになっていた。

「このたびの挙兵、すべては風姫のもたらす託宣に従うぞ」

長沙を発つ前に、孫堅は全軍の將兵にそう宣言したのである。

風姫は美貌の女性であった。彼女の名声には、その託宣の靈驗のほかに、女としての魅力もす

くならぬ要素を占めていたのであろう。

「ふん、女を連れて来るのか。……いずれ、色好みの孫堅の妾めかけのようなものであろう」
にがにがしげに言ったのは、荊州刺史の王叡おうえいであった。

王叡は傲慢ごうまんな男であった。

黄巾戦のとき、この男は孫堅とコンビで働いたことがある。どうしても孫堅のほうに、すべてにつけて目立つので、王叡はおもしろくなかった。

——なんだ孫堅なんて戦争しか知らない兵隊じゃないか！

ことあるごとに、吐きすてるようにそう言っていたが、むろん孫堅の耳に入るのを承知のうえである。

——おれはえらいのだ。

ということ、自分にも他人にも納得させるために、必要以上に威張り、大言壮語しなければ気がすまないという、まことに厄介な人物だった。そんなことで、対人関係は芳かんばしくない。敵が多かったが、仲直りなど考えたことはなく、ふたこと目には、

——なにかあれば、まっ先に殺してやる。

と、物騒なことを言う癖があった。

武陵郡の太守曹寅そういんも、王叡と折合いが悪かった。武陵は洞庭湖のそばにあり、管轄内に桃源郷があることで知られている。

不仲の原因は、まことにばかばかしいことだった。荊州刺史と武陵太守のあいだには、とうぜん冠婚葬祭の贈答がおこなわれる。王叡は贈った品よりも貰った品のほうが粗末だと思ったので、

——曹寅はケチだ。

——と言いつらした。曹寅はそれを聞いて、

——王叡は馬鹿だから、カサばったものをりっぱだと思っている。小さくても貴重なものがあるのを知らない。目がないのだ。

と、左右の者に言った。

それが王叡の耳に入ったからたまらない。

——よし、殺してやる！

と、例の口癖が出た。それが、まわりまわって、曹寅の耳に達したのである。

曹寅は小心者で、まえまえから王叡の言動を気に病んでいた。

董卓追討の檄は、この地方にも飛ばされたが、各地長官はそれに応じて、兵を挙げる準備をしていた。王叡はよせばよいのに、動員令を出すとき、

——武陵の曹寅を血祭りにあげてから、洛陽へむかうのだ。

——と言った。本気なのか、景気をつけるためなのか、おとな気のない言動といわねばならない。

じつは曹寅を殺すつもりはなかった。どうせ話は相手の耳に入る。

——きやつ、気が小さいから、ビクビクしやがるだろう。ざまあみろ。